

受賞者紹介

人命救助の功績

藤田 匡二	032
河野 正二／河野 よね子	034
竹内 亘／小林 慎太郎	036

社会貢献の功績

特定非営利活動法人 京都マック	040
札幌遠友塾 自主夜間中学	042
五十洲 廣明	044
パソボラ こころのかけはし	046
特定非営利活動法人 かいろう基山	048
移川 仁郎	050
社会福祉法人 若竹福祉会	052
NPO Vハート	054
株式会社 チットチャット	056
社会福祉法人 南高愛隣会（コロニー雲仙）	058
社会福祉法人 風舎	060
社会福祉法人太陽会 しょうぶ学園	062
NPO 法人 海外に子ども用車椅子を送る会	064
NPO 法人 スマイルクラブ	066
神 幸雄	068
NPO 法人 チェルノブイリ医療支援ネットワーク	070
藤田 善史	072
カサノバ エクトル	074
香月 武	076
特定非営利活動法人 チェルノブイリへのかけはし	078
井上 勝江	080
公益社団法人 家庭養護促進協会	082
ホーチミン市ストリートチルドレン友の会	084
「北九州再発見」ミャンマー学校支援	086
中田 ケンコ	088
アナコット カンボジア	090

NPO 法人 カンボジアフレンド協会	092
臼田 玲子	094
Saetanar	096
山本日本語教育センター	098
藤田 京子	100
特定非営利活動法人 フリースペースふきのとう	102
小林 普子	104
安田 光一	106
特定非営利活動法人 東京シューレ	108
秋田 稔	110

特定分野の功績

海の貢献賞

三浦 榮一	114
馬塚 丈司	116

東日本大震災における救難活動の功績

宮城県亘理地区オストメイト支援チーム	120
一般社団法人 震災復興支縁協会つながり	122
浅見 健一	124
田村 満	126
青木 孝文	128
高橋 芳喜	130
NPO 法人 ゆめ風基金	132
成富 真介	134
みんなでがんばろう逗子プロジェクト	136
特定非営利活動法人 Youth for 3.11	138
被災地における高齢者への肺炎球菌ワクチン緊急接種プログラムワーキングチーム	140
高松市消防職員協議会 中井 聰	142

人命救助の功績

- 海難・水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助・救援に尽くされた功績
- 犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- 災害・事故・犯罪の発生を未然に防いだ功績



藤田 匡二

-----032



竹内 亘

-----036



河野 正二

-----034



小林 慎太郎

-----036



河野 よね子

-----034

藤田 匡二



埼玉県

平成 24 年 3 月 20 日午後 9 時 10 分頃、東武伊勢崎線春日部駅構内のホームで電車を待っていたところ、同ホームから人が転落したのを目撃した。転落した男性の様子を確認していたところ、回送列車が通過するとアナウンスが流れたため、とっさに線路に降りたが、引き上げるのは無理と判断して、向いのホーム側に引っ張り出していたところ、回送列車が急制動を掛けながら進入してきた。転落した男性は電車のスカート部分と接触したため、右腕前骨折等負傷したが、間一髪一命を取り留めた。

◇推薦者：春日部市消防本部

仕事の帰りに船橋から東武野田線に乗って、乗り換えのため春日部駅にいました。時間は何時頃だったのか今ははっきりとは覚えていませんが、線路に落ちた男性は、階段から降りてきたと思います。「フラフラしているな…落ちるなよ、落ちるなよ」と思って見ていたらホームからあっという間に転落しました。同時に回送列車が来るというアナウンスが流れたので「まずい！」と思いすぐに線路に降りましたが、そこに待避溝はなく、反対車線の列車が来たら嫌だなと思いながら、真ん中の線路側にその男性を動かしました。男性は少し列車に接触したみたいで、列車が止まってから「ん〜」と痛みを訴えるような声を出していました。

私がいたホームにも、向かいのホームにも人はいましたが、誰も非常停止ボタンを押してくれたり、駅員さんと呼んでくれたりしている気配はありませんでした。列車が止まったときに大声で「駅員呼んで！」と叫びましたが、その後どうしたのかはあまり覚えていません。救助した男性がどんな具合だか、運ばれる前に様子を伺ってみました。その時は良くわかりませんでした。

救助した時は、全く怖いとは思いませんでした。というより何も考えていませんでした。とにかく、「轢かれてしまう!!!」と思い、とっさに線路に降りていたので。回送列車はカーブで駅に進入してくるので減速していたようですが、運転士は私たちが線路付近にいることに気が付いて急ブレーキをかけたようでした。転落した意識の無い男性を動かすのは重くて大変でした。

今となっては、入って来た列車が急行列車でなくて良かったな、とつくづく感じます。



▲男性は階段を下りて来てフラフラと歩き線路へ転落した



▲東武伊勢崎線（現東京スカイツリーライン）春日部駅3番線ホーム



河野 正二 河野 よね子

茨城県

平成 24 年 11 月 27 日午前 8 時 45 分頃、茨城県日立市のアパート 3 階で、男児（3 歳）が窓の格子の間に頭が挟まり、首から下が格子の外側に出て宙吊りのような状態で泣き叫んでいる所を、向かいのアパートから河野よね子さんが発見し、夫の正二さんと救出に向かった。正二さんは男児の部屋に向かい、よね子さんは 119 番通報した。男児の部屋は施錠されていたため、正二さんはアパートの共用階段の踊り場から、男児が宙吊りとなっている階下の住宅のひさし（奥行約 45cm、幅 2.25m、地上まで高さは約 7m）に飛び移り、ひさしの上で消防隊が到着するまで男児を支え続けた。男児は軽傷で済んだ。

◇推薦者：日立市 市長 吉成 明

平成 24 年 11 月 27 日の朝、妻のよね子が出勤前に洗濯物をベランダで干していたところ、どこからか子供の泣き叫ぶ声が聞こえてきたので、ふと向かいのアパートの方を見ると、3 階の高さ約 10m の窓の格子に頭が挟まり、首から下が外に出て宙吊り状態で助けを求めている 3 歳男児を発見した。

驚いた妻が寝ていた私を起こし、事情を聞いた私は慌てて下着姿のまま、男児の落下を考慮し、クッション代わりの布団を抱えて大急ぎで男児の元へと駆けつけた。

妻が男児宅へと向かったが、男児宅は施錠され不在だったので、近所も全てインターフォンを鳴らしてみたが、生憎平日の出勤時間を過ぎた頃であり、アパートで在宅している家はなかった。

その為、妻は近所の人に電話を借りて 119 番通報し、私はこのままでは男児が窒息してしまい危険だと判断して、階段の踊り場へ行き、そこから防護壁によじ昇り、約 1 メートル離れた 2 階の廂に飛び移った。廂は奥行が 4.5cm、巾 2.25cm と非常に狭く、自分自身も 10m の高さから落下の可能性があり、恐怖や命の危険も感じたが、私にも同じくらいの年頃の孫がおり、助けを求めている男児と孫が重なって見え、何が何でも助けたい、その一心で必死に男児の元へと辿り着き、片手で自分の体を支えながら、窒息しないように反対の手で男児を抱え上げて、レスキュー隊が到着し、はしご車で救出されるまでの約 7 分間、「大丈夫だ、がんばれ」と真っ青な顔でグッタリしてしまった男児を励まし、声をかけ続けた。たった 10 分弱だったが、その何倍にも私には思えた。

腕は痺れて感覚はなくなり、足は震え、いつ落下してもおかしくない状況で、ど

うしてあれだけの力が出せたのか、無我夢中だったとしか言い様がありません。

今回、目の前の小さな命を助けたい、その一心で行った行為で思いがけずこの度受賞のご連絡を頂き、恐縮するとともに、改めて振り返ってみると、救出された後、母親とともに元気に走り回り男児が笑顔を見せてくれたこと、男児の家族の喜びの笑顔等が思い出され、この家族の未来や笑顔を守ることができ非常に喜びを感じるとともに、命の大切さを考えさせられ、私にとって一生忘れられない出来事になったことを感慨深く思います。

平成 24 年 12 月 18 日、日立市消防長出頭正道様より人命救助感謝状を頂き、この日立市長吉成明様よりご推薦いただき、この様な名誉ある立派な賞を戴けることになりました。有難うございます。

社会貢献者表彰式典の会場では、650 余名の中での受賞で感涙むせぶ思いであります。改めて日下会長をはじめ関係者の方々に御礼と感謝を申し上げます。私たち家族にとって一生の思い出になりました。ありがとうございました。



▲毎日新聞 2012 年 12 月 19 日



▲消防本部にて感謝状を受け取った河野さん



▲河野宅からみた現場



▲男児の首が挟まった格子



竹内 亘

福岡県



小林 慎太郎

福岡県

平成24年11月19日、福岡県宇美町で発生した住宅火災で、下校途中の小林さんは建物内に人影を目撃したため、付近にいた竹内さんに「中に人がいる」と声を掛けた。二人で建物内に入り、70歳代の夫婦を救出した。火は天井まで達しており、救助された夫人は足に火傷を負っていたため、二人で脇を抱えるように外へ連れ出した。その後消防隊が到着した。消防隊は「防火服を着ていても近寄りたがたいほどの熱さだった。二人に救出されていなければ、ご夫婦の命は危なかったかもしれない」と語った。

◇推薦者：宇美町役場 総務課

竹内 亘

この度は身に余る表彰を受け心より厚くお礼申し上げます

このような席で私ごときが表彰して頂くことは、生涯で忘れることのないものとして、胸の奥深く残るものと思います。ここにお招き頂いた関係者、又町の関係者の方に厚く重ねてお礼申し上げます。

今回の火災は町内に置いて、近年にない大火災で、夜間に発生していたなら人的被害がもっと大きかったと思われま。当日近所の方から携帯で火災の知らせがあり、仕事に行く準備をしていましたが、表に出るとすでに火柱が屋根から上がっていました。家の中には誰もいないと感じていましたが、下校途中の小林君が人影を見つけ二人で中に入り、火と煙の中、洗面器で水をかけ消火活動をしている老夫婦を発見、髪は焼け手足に火傷をしておられたので、先にご主人を外につれていき、手足に火傷を負った奥さんを二人で外に連れ出しました。

私どもは偶然にその場にいたので、人



▲竹内亘さん（空地になった現場）

命救助となりましたが社会の中では、人と寄り添い継続して援助されている方がたくさんおられる事を知り、又受賞者代表の神幸雄さんの挨拶には感銘を受け、夫婦でこの場に出させて頂いた事に感謝いたします。

小林 慎太郎

僕は、学校の帰り道に偶然火事を見つけて、友達と興味本意で見に行きました。

初めて目の前で見る火事に驚いている中、燃えている家の中に人影を見つけ、助けを求められ、近くに居た竹内さんと家の中に入り、逃げ遅れた方を助けました。

後で思うと熱かったし、危ないことをしたな…と恐ろしくなりますが、その時は無我夢中で、ただ助けないといけない…という思いがありました。

その時は、自分なりに出来ることをやっただけだったのですが、その後消防署や警察署で表彰を受け、すごいことをしたのかな、と思いました。

今回、宇美町役場の方から推薦をして頂き社会貢献者として表彰を受けることになりましたが、今年高校入学し、勉強と部活についていくのが精一杯で、東京に行くことなど考えることが出来ませんでした。しかも、たまたま偶然の出来事でお金を頂くことなど出来ないと思いましたが、両親や学校の先生に勧められ、学校も公休になると言われ、行くことにしました。

表彰式ではいろいろな方の社会貢献の発表を聞くことが出来ました。

世の中には、ボランティアという形で社会のため、人のため、動物のために尽くされている方が沢山いるのだなあと感動しました。

日頃の生活の中では分らない、とても貴重な体験をさせて頂きました。

まだ、進路が決まらない自分ですが、将来は社会のため、人のために働けるような職業に就きたいと思いました。

今回、周りの方々の支援のおかげでこの様な体験をすることができました。

ありがとうございました。



▲小林さん（空地になった現場）

社会貢献の功績

- 精神的・肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績

 特定非営利活動法人 京都マック ----- 040	 NPO 法人 海外に子ども用車椅子を送る会 ----- 064	 中田 ケンコ ----- 088
 札幌遠友塾 自主夜間中学 ----- 042	 NPO 法人 スマイルクラブ ----- 066	 アナコット カンボジア ----- 090
 五十洲 廣明 ----- 044	 神 幸雄 ----- 068	 NPO 法人 カンボジアフレンド協会 ----- 092
 パンボラ こころのかけはし ----- 046	 NPO 法人 チェルノブイリ医療支援ネットワーク ----- 070	 臼田 玲子 ----- 094
 特定非営利活動法人 かいろう基山 ----- 048	 藤田 善史 ----- 072	 Saetanar ----- 096
 移川 仁郎 ----- 050	 カサノバ エクトル ----- 074	 山本日本語教育センター ----- 098
 社会福祉法人 若竹福祉会 ----- 052	 香月 武 ----- 076	 藤田 京子 ----- 100
 NPO V ハート ----- 054	 特定非営利活動法人 チェルノブイリへの かけはし ----- 078	 特定非営利活動法人 フリースペースふきのとう ----- 102
 株式会社 チットチャット ----- 056	 井上 勝江 ----- 080	 小林 普子 ----- 104
 社会福祉法人 南高愛隣会 (コロニー雲仙) ----- 058	 公益社団法人 家庭養護促進協会 ----- 082	 安田 光一 ----- 106
 社会福祉法人 風舎 ----- 060	 ホーチミン市 ストリートチルドレン友の会 ----- 084	 特定非営利活動法人 東京シュール ----- 108
 社会福祉法人太陽会 しょうぶ学園 ----- 062	 「北九州再発見」 ミャンマー学校支援 ----- 086	 秋田 稔 ----- 110

特定非営利活動法人 京都マック



理事
辻井 秀治

京都府

アルコール、ギャンブル、薬物、摂食障害、買い物等の様々な依存症からの回復を支援する団体として平成19年に設立された。(平成2年から18年は民間団体として活動) 地元の精神病院と連携し、専門家を交えて依存症からの回復プログラムを行っている。主にグループセラピー(ミーティング)を中心にプログラムされている。その他 ヨガ・茶道・音楽社会見学・レクリエーションと多様な活動を通して依存症からの回復に取り組んでいる。また利用者が健康的な生活習慣を身に付ける訓練も行っている。利用者は定期的に京都マックに通所し、上記の活動を通じて依存症から回復・社会復帰を目指す。回復した利用者の中にはリカバリースタッフとして、支援する立場で活動している。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は、社会貢献者表彰の受賞をいただき、誠にありがとうございます。また財団の関係者の皆様には、取材の段階から、審査、受賞の決定後の新幹線やホテルの手配、夕食会及び表彰式、祝賀会での歓迎など、様々な場面でお世話になりました。普段接することのないお料理とサービスも経験させていただき、本当に幸せでした。お世話になった関係者の皆様、本当にありがとうございました。

京都マックの活動の中心は、アルコールやギャンブル、薬物、摂食障害、買い物等、様々な依存症の回復プログラムを提供する事です。毎日、利用者(マックでは仲間と呼びます)は、京都マックに通所して、1日2回のミーティングに参加します。ミーティングでは、過去の自分を振り返り、テーマに基づいて、ひとりずつ静かに話をします。他の仲間は発言をせず、ただ静かに聞き、議論する事なく進めていきます。過去の自分を語ることで、現在の自分を見つめ、これからの自分につなげて行く事を目的にしています。

ミーティングの他、調理実習や掃除、生き物の世話など、雑用も含めて、仲間が分担して行います。仲間が生活習慣を習得する大切なプログラムです。ソフトボールやバレーボールなどのスポーツ活動、美術館などの社会見学、野外でのレクリエーションなどを実施しています。何れの活動も、仲間がリーダーになり、準備や仲間の先導を行ないます。仲間同士の協力や葛藤、段取りの大変さを経験する貴重な機会となっています。

職員は、上記プログラムの立案と提供、個々人に応じた計画策定、個別相談などを行なっています。加えて、プログラムがスムーズに受けられるために、医療や福祉、保健などの関係機関との連絡や調整、会議を常に行っています。また、仲間のご家族、未治療のご家族も含めた方々を対象に、家族会を実施。依存症の知識を学習して対

処方法を習得すること、ご家族が安心して感情を吐露できる場所を提供しています。その他、「メッセージ活動」と称して、精神科の病院、医療少年院、大学の社会福祉の講座に出向き、京都マックの紹介と、依存症は回復するというメッセージを伝える活動を継続的に実施しています。

現在の職員8名のうち3人は、以前マックに通所していた元仲間です。同じ依存症者が働く姿とその助言は、仲間にとって、回復への大きな希望となっています。京都マックは開設して、まもなく24年目を迎えます。これまでご支援とご協力をいただきました多数の関係者の方々の感謝を申し上げるとともに、依存症に苦しんでおられる人々の回復の為、これからも活動を拡げていきたいと思っております。今回いただきました受賞は、その激励と受け止め、法人職員・仲間一同、頑張っまいます。今後どうぞ温かく見守って頂きたく、またご協力をよろしくお願い申し上げます。

入江 泰



▲ 仲間の共同作品



▲ 依存症相談の様子



▲ 建物外観・京都水族館近く



▲ 施設内の食堂



▲ 調理場

札幌遠友塾 自主夜間中学



代表
遠藤 知恵子

北海道

1990年に有志により始められた北海道で初めての自主夜間中学校で、今年で24年目を迎え、これまでに420人が学んできた。受講者は戦後の混乱で教育が受けられないまま大人になった人、中国残留孤児やその家族、外国人労働者、不登校や引きこもりなど様々。授業は週一回水曜日の6時から9時まで行われ2教科の授業があり、国語、数学、社会、英語の他、遠足や社会見学、クラス発表会などの行事も行っている。

毎週釧路から何時間もかけて登校していた老夫婦は、一年後に生まれて初めての年賀状を講師宛に送ってきた。講師はボランティア、授業料と賛助会員200人からの寄付金で運営されている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

札幌遠友塾は、北海道で初めての自主夜間中学校として平成2年に設立いたしました。以来、24年目を迎え、今年までに420人余りが学んできております。

戦後の混乱で教育が受けられなかった人、中国残留孤児やその家族、外国人労働者、不登校や引きこもりなど、受講生は年齢も理由もさまざまです。12月現在受講生は64名、登録ボランティアスタッフは78名おり、運営は賛助会員の会費や寄付で成り立っています。

目標は、3年間で中学一年程度の学力をつけること、週1回、国語、数学、英語、社会のうちから2科目ずつ授業を行っています。クラスは1年から3年までと、マンツーマンでその人にあった授業を行うじっくりクラスの4クラスで展開し、生徒それぞれの事情に寄り添って活動しています。また授業のほか、遠足や社会見学、クラス発表会などの行事も、重要な学習機会として位置づけています。

毎週水曜夜、5時半に受付が始まり「はじめの会」に続いて授業、ホームルームや帰りの掃除、その後スタッフミーティングがあり、校舎をあとにするのはいつも9時を回っています。遠友塾は初めて安心して「わからない」といえるところ、一つ学ぶごとに世界が広がっていくようでうれしい、共に学ぶ仲間やスタッフとの交流がとても楽しい居場所等々、厳しい生活を強いられてきた受講生の明るい声に、スタッフのほうに励まされ癒される日々です。

遠友塾は、生きていく上で不可欠の基礎的学びの機会を得られず苦勞している人々に、是非とも学習機会をとという思いではじめられた活動ですが、最近希望者が次第に減少傾向にあります。ただ、受講生の口からは、「いろいろ回り道をしてやっと自主夜間中学という場にたどり着いた」、「もっと早く知りたかった」との声が聞かれ、まだまだ多くの希望者がいることが推測されます。また、周りの理解や施設

の制約から、あるいは経済的な面から申し込んでもあきらめざるを得ない方もおり、なんとか学びを求める人がひとりでも多くその機会を得、より幸せな生活を手に入れてほしいと願わずにはおられません。

その意味で、私どもの活動に目を留めていただいた今回の受賞は貴重な機会となり、心より感謝しております。また授賞式の際は、私どもの知らないところで、これほど多くの助け手を求める人がおり、これほど多くの支援活動が行われていることに驚き感動する場ともなりました。そのような方々との貴重な交流の場となったことも大きな収穫でした。

代表 遠藤 知恵子



▲3年生の授業風景



▲クラス発表・忘年会



▲じっくりクラスの授業風景



▲修了式・卒業式

五十洲 廣明



青森県

視覚障がい者の相撲ファンのために、全国で唯一の相撲専門テープ雑誌を自費で28年にわたり作り続け、昨年には製作本数200本を超えた。青森県庁職員だった五十洲さんは、相撲好きの同僚が集う相撲道研究会で機関誌「心技体」を発行していた。失明してしまった小学校の同級生の「もっと相撲について耳で聞ける情報があれば…」という言葉がきっかけで、月に1回のペースで「心技体」の朗読や相撲雑誌からの情報などを拾って90分のテープに吹き込み、「声の心技体」とし、全国の相撲好きな視覚障がい者に届けている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

私が視覚障がい者の相撲ファンのために、「声の心技体」とネーミングした全国で唯一の耳で聞く相撲専門テープ雑誌第1号を発行したのが、昭和60年12月であるから、この12月で29年目に入ったことになる。

キッカケは、交通事故で失明した小学時代の友人が、「目の不自由な我々にも相撲好きは沢山いる。だけど、情報はテレビかラジオの実況やニュースだけ。満足に楽しめていない」とぼやき、さらに「五十洲、お前が読んでくれ」と懇願されたからである。しかし、録音するにはテープの容量だけのネタ（原稿）を必要とするため暫く躊躇していたのだが、当時、私は相撲好きの仲間と相撲道研究会を立ち上げ、大相撲が開催される奇数月に機関誌「心技体」を発行していたので、その機関誌に掲載した記事を主体に60分テープに録音し、年6回発行することにしたのである。その後、90分にしてくれと頼まれたため、場所が始まる月には番付や注目力士に関する情報などを、場所が終了した翌月にはその場所をレビューする他、相撲雑誌から昨今の相撲事情を拾うなどリアルタイムな情報を提供することとし、月1回、90分テープでの発行にしたのである。

仕事を持っている私の録音作業は、月初めの土曜日か日曜日に自宅で行うが、スタジオがないため、家族が寝静まった時間帯になってしまう。子供が小さい頃は、妻が子供たちを早く寝かしつけてくれたり、物音を立てないように協力してくれたのだが、深夜であってもバイクの音だったり犬や猫の鳴き声が入ってしまう。そして、最も時間がかかるのが読み違えては巻き戻しをして録音し直す作業であり、このため、90分テープが完成するまでには4～5時間を要する。その後、読み違えないか、雑音が入っていないかなどのチェック作業を行ってやっと出来上がるのだが、夏の時期だと外が白々と明るくなっていることも度々である。

さて、この度、このような栄えある賞をいただきましたが、ただ単に、友人との約束を守って読み続けてきた結果が29年目の継続に繋がっただけであり、まさに青

天の霹靂の思いです。ましてや、人命救助などで受賞された方々と肩を並べての受賞は、誠におこがましい限りです。とは申しましても、今回の受賞に対し、心からの御礼と感謝を申し上げます。

これを機に、いただいた賞に恥じることないようにさらに精進し、7年後に到達する予定の「声の心技体」第300号の完成を目指す所存です。

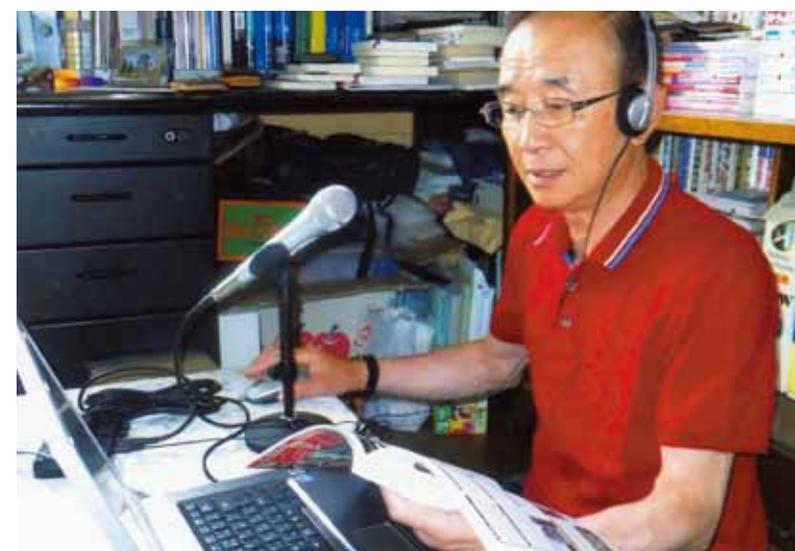
産経新聞 2005年9月1日 ▶



▼ 東奥日報 2004年4月8日



▲ 録音の資料となる相撲に関する書籍類



◀ 録音風景

パソボラ ころろのかけはし



吉浦 正利 久保 宏記 新立 成幸 吉村 隆樹 三根 勤

長崎県

長崎県鹿町町（当時・現佐世保市）で1999年に役場の保健師から、難病が進行している人や障がい者とパソコンソフトで意思伝達が図れないかと相談があり、簡単な操作でコミュニケーションを図れるソフトウェア「HeartlyLadder」の開発を始めた。2000年にはインターネットで無料のソフトウェアとして公開、配布し、入力スイッチの作成やサポート活動を行ってきた。さらに2011年には自分の声で文章を読み上げさせることが出来る「MyVoice」機能を付加し、公開した。筋委縮性側索硬化症やパーキンソン病などの難病患者のために、声が出るうちに自分の声で50音や濁音などを録音しておき、声を失ったあとでもパソコンで文字を入力すれば自分の声で文章を読み上げることができるもの。（同じような機能を持つソフトは有料の場合100万円程で販売されている）メンバーは会社員（プログラマー、医療関係）作業療法士、保健師等で構成されている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は社会貢献表彰という大きな賞をいただき、本当にありがとうございました。授賞式に出席して改めてこの賞の大きさを知り、喜びを新たにしました。

私たちは、ハーティラダーという障害のある方のためのソフトを開発し、サポートをしています。

このソフトでは、障害のため、マウスやキーボードが使えなくても、体のどこか1カ所さえ動かせれば、文章を書いてメールやインターネットを楽しんだりできます。

開発を始めて、もう14年が経ちました。最初は、簡単な文章を書くためのもの

をと思って作り始めたのですが、公開してみると、全国でたくさんの人たちが使ってくださり、皆さんからはたくさんの要望が寄せられ、それらに応えてきた結果、多くの機能を有するものになりました。今では、インターネットはもちろん、Windowsで



▲ながさきコミュニケーションエイド研究会定例会にて（平成24年3月）

きることは、何でもボタンひとつでもできるようになっています。

また、最近、マイボイスという新しい機能を装備させました。これは、ハーティラダーに入力した文章を自分の声で読み上げるというものです。病気のために、声を失ってしまっても、自分の声で会話ができると、利用者の方にはとても喜んでいただいています。中には、このことがきっかけで、人工呼吸器をつけても生きようと決心された方もおられると聞きました。そういう話を聞くたびに、本当にこのソフトを作って良かったと思います。

ところで、私たちのソフトはこれだけあれば良いというものではありません。これを使ってくださる方は、障害のある方で、自分で操作できない場合がほとんどです。マイボイスにも、録音や声の編集といった多くの方達の協力が必要です。でも、嬉しいことに、私たちのソフトに関しては全国各地にサポートをしてくださる方がたくさんいてくださいます。その方達のおかげで、多くの人たちにこのソフトを使っただけでいるのです。今回も、その人たちと一緒に受賞したと思っています。そして授賞式には東京で活動しておられる方達が来てくださって、一緒に、受賞を喜んでくださいました。

私たちのソフトも、まだまだ改良の要望が寄せられていて、解決しなければならないことがたくさんあります。これからも、全国のサポートしてくださる人たちと共に、利用者さんの笑顔のために、これからもソフトの開発やサポートを続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

吉村 隆樹



▲ コミケンフォーラムで（平成17年11月）



▲ 福岡県古賀市健康福祉まつりでのデモ（平成16年10月）



▲ デモンストレーション（平成24年9月）



▲ 西日本国際福祉機器展でのデモ（平成16年11月）

特定非営利活動法人 かいろう基山



理事長
平峯 一郎

佐賀県

佐賀県基山町で平成16年から、元気な高齢者が竹の侵入した里山の荒廃を見て、森林を侵食する竹を伐採し、広葉樹を植栽するなどの里山保全の活動を通じ、環境の大切さを地域住民や子どもたちに伝え、地域の人々を巻き込んだイベントを開催するとともに子どもの健全育成や地域の活性化に取り組んでいる。同県の「県民参加の森林（もり）づくり事業」を活用し、里山保全活動のリーダーを育成したり、多分野の団体や企業等と連携協力を模索している。活動に不可欠な寄付やボランティアを獲得するため「ファンドレイジング」の手法として、自らの団体の活動をまとめた1分間CMをインターネット上に公表して広く社会にアピールしたり、民間の製菓会社に「里山保全」を協働で行う提案をするなどの取り組みも行っている。

◇推薦者：佐賀県くらし環境本部男女参画・県民協働課

このような栄誉ある賞を頂き、会員一同心から感謝申し上げます。また、表彰状を頂いた時は、“これまでコツコツと続けてきて本当に良かった、弊団体にとってこの上ない名誉を頂いた”としみじみと思い、苦楽を共にした会員達の顔が脳裏に浮かんで来て、とても晴れがましい気持ちでした。

私共は、70歳前後の有志者主体で老いを愉しみながら社会貢献を目的に、平成16年1月に「かいろう基山」を創りました。主たる事業は、繁茂する孟宗竹を伐採・処理し、その地に広葉樹を植え、何度でも訪れたい緑と清流の森へと再生することです。そして、森づくりをとおし、人づくり、地域づくりを目指して活動しています。

以来10年の歳月が流れました。この間苦楽を共にした数名の仲間が鬼籍に旅立ちました。しかし、森林整備をライフワークとしたい若い仲間が逐次入会し、新たな発展を目指して活動しています。将来へ大きく羽ばたく空気・希望を宿しながら毎日（火～土曜）原則午前中活動しています。里山保全のボランティア活動を午前中だけですがやっている団体は、全国的にも稀有な団体ではないかと自負しています。一昨年は119日、昨年は95日ほど里山整備作業を実施しました。大変な日数です。そして、その山林でのボランティア現場の推進力になっているのが80歳前後の高齢者です。一般的風潮として老人が何時までも居座っている組織は発展性がない側面もありますが、法人かいろう基山は、スーパー老人を核として若・老人が一体となって、衆人の目に届かない現場で黙々と活動している貴重な存在であります。現場では高齢者の培った経験・技術・知恵を、実践しながら若いと言っても60代・70代の方々

ですが、彼らに教え、次世代に引き繋ぐことを実施しています。

このような会員による里山整備以外に、整備した地域への植樹活動を通じ、子どもたちに環境の大切さを伝えたり、地域の人々を巻き込んだ竹きり体験・下刈り体験などのイベントの開催や他分野の団体・企業などと連携して、地域の活性化や子どもの健全育成に取り組むことをしています。また、県事業「県民参加の森林（もり）づくり事業」のプロジェクトを活用し、里山保全活動のリーダーも育成しています。

こうして多くの人々に支えられ、今後も老若男女多世代が一体となって、かいろうの字句の通り、老いを愉しみながら愉しく働き、自分・隣人・地域のために悔いなき人生を過ごすことをお約束いたします。

おわりに、公益財団法人社会貢献支援財団からの受賞に、深甚の感謝を申し上げ、貴財団の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

▼竹炭を作る窯



▼イベント：下刈り体験



◀完伐後の会員たち



▲育林市民力養成講座（炭焼き準備）



▲植樹祭（H23.3.13）

移川 仁郎



宮城県

気仙沼市の三峰病院の院長であり第2次大戦中は軍医としてフィリピンのケソン州インファンタに従軍し、部隊唯一の生還者となったことから戦後慰霊のため同国を訪れ、30年以上にわたり同地区の村々に小学校の建設、井戸や水道施設の建設、医療器具や薬、無料診療などの支援を実施していた。また人材育成のため奨学金制度も設けており、毎年現地を訪れ、事業の様子を確認し、奨学生候補者の面接やテストも自ら赴き立ち会った。これらの支援活動は殆ど私財を投じて行われた。同地区は戦後入域が困難となっていたが、移川さんの奉仕活動などの結果、今では親日友好の地区となっている。

◇推薦者：河村 俊郎

第二次大戦に於いて、フィリピンでは、多くの人々に多大な犠牲者が出て、今もって心が痛む。フィリピン全域での戦没者は、邦人を含め他を上回り最も多く51万8000名と言われている。移川氏は第2次大戦末期の昭和19年後半期、マニラ防衛隊の軍医として海没負傷兵の手術、治療に不眠不休で当たっていた。

その後、日米軍の凄惨な市街戦となったマニラから脱出してマニラ東方の山地（マッキンレー）で負傷兵の手当にあたった。

この地での振武集団の最期は、悲惨を極めた。インファンタ地区には、まずマニラ市街戦で本隊と切り離された南部の陸戦隊7000人が、マニラ東方海軍防衛部隊に再編されて集結した。米軍はマニラ攻略後、その矛先を東方に向け攻撃を開始。これに併ない残存の海軍部隊は、逐次ルソン島の東海岸のインファンタ地区に向い、持久戦に入っていた。米軍の直接の攻撃は無かったが、一帯は米比軍ゲリラが多く常時小戦闘が続いていた。

8月15日、同地での移川氏の部隊は夜間、強力なゲリラに急襲された。移川氏は幸い連絡の為にこの駐屯地を離れていたため難を逃れたが、翌日帰隊して見れば正に地獄の様相で殆どが戦死、残ったのは、移川氏一人であったという。

負け戦になっての飢餓地獄は、どこの戦場も同じだが、マニラ東方山地は、それが取り分けひどかった。山は深いけど北部ルソンの山岳地帯に比べれば狭い地域である。そこへ一度に米軍の大軍に追われた敗残の軍が、入り込めばどうなるか目に見えている。マニラ市街戦を含め振武集団地区での戦没者は、最終的に9万9千人に達したとされる。

9月6日太平洋岸インファンタ町で武装解除を受けたが、ここに着くまで路の両側に並んだ現地人の増悪に満ちた眼差しは、忘れられないという。そして乗せられた上陸用舟艇にはためく米国旗を見て「本当に日本は負けたのだ」と知った。更にカンルーバンの捕虜収容所まで乗せられた無蓋トラックに沿道から「バカヤロウ」などの罵声を浴びせられ、沢山の小石も投げ



▲ 歓迎する子供たち

られたという。その中で移川氏は、米軍に追われ、アゴス川流域をさまよい海軍部隊の軍医で、生死の境をさまよい奇跡的に生還した場所は、生涯忘れられないと語っている。

日本へ帰った後、いつかこの地を訪れ、ここで散華した戦友の慰霊をしようと思いつね日頃思っていた。そして、家族の反対もあったが60歳からは、フィリピンに斃れた英霊（戦友）に捧げる歳月をおくりたいと考えた。戦後36年の歳月を経た昭和56年11月、日比両国の関係改善を背景に、移川氏は治安の悪さをおかして、インファンタ地区に入り、巨勢隊等が居た山々が見えるアゴス川カナン川合流点の川原で、ようやく無念の涙をのんだ同胞を慰霊することができた。偶然にもここで寝泊まりした小学校で親身に世話してくれた地元の小学校校長は、元ゲリラ兵で、終戦の夜移川氏の隊を奇襲したことを知らされた。戦時は敵で、今日は友人となった。

毎年の軍医仲間と2人、時には、ご遺族の方といっしょに現地を訪れ、祭壇を作り、日本の煙草、酒、菓子などを供え線香に火を点し、読経のもと手を合わせ慰霊した。現在でこそ道路も良くなり、治安も回復しているが、最初の訪問時は、まさに命懸けであった。

以来35年、小学校の先生との人間関係から始め、村民の治療、水道施設、学校の再建等インフラを私財を投げ入れて奉仕してきた。この結果、村民との深い絆を作り、インファンタ地区にとっては移川氏はなくてはならぬ存在となっている。

現在、一応の村々のインフラは整い教育も盛んになり、移川氏はそこで、地区の青少年の教育のため奨学金制度を創設。生徒の選考委員会（地区の有識者数名）を年1回、直接現地で高校、大学への希望者の選定をし、88名の大学生を卒業させている。また気仙沼市とインファンタ地区の小学校の交流も30年近く続いている。

移川氏の遺したインファンタ地区の戦没者への想いから始まった犠牲的奉仕の精神とその業績の実りは、永遠に地区の人々の心に深く残る事と信じる。そして日比のこれからの友好的発展に多く寄与する事と思う。

（移川仁郎氏が入院中のため、推薦者の河村俊郎氏と慰霊の協力者である倉津幸代氏により移川氏の活動についてまとめていただきました）



▲ 支援する学校の前で（右）



▲ フィリピンでの活動の様子



▲ 院長を勧める病院前で



▲ 移川さんを歓迎する子供たち

社会福祉法人 若竹福祉会



理事長
村田 涼子

沖縄県

1981年（昭和56年）に沖縄県内において、障がい者の働く場を創ろうと、養護学校の教諭や生徒の父母、地域の人と共に母体が結成され、翌年82年に、無認可作業所としてスタートして、創立31周年を迎えた。知的障がい者の働く場として、あるいは職場適応への支援など、社会的に自立するためのサポートや、障がい者の家族の相談にも応じている。県内で6ヶ所の事業所を運営し、2012年には県総合福祉センター内に「カフェめし&ギャラリーさままま」をオープンし、地域の人々のコミュニティーの場として絵画展やコンサート、講演会などを開催している。これからも、障がい者の社会参加、就労の場の提供、家族を支える活動を継続して行っていく。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

昨年の6月、台風接近の中を社会貢献支援財団の方が、当法人に調査にこられました。あれから一年経って、日々の活動に追われ、すっかり忘れていた今年6月、社会貢献支援財団より社会貢献表彰の内定のご連絡を頂き、9月に決定通知が届きました。この間、私は「本当に若竹福祉会で良いのだろうか？」と自分に問いかけてきました。社会の中では私たち以上に、人知れずたゆまぬ努力をなされている方が多くいらっしゃる中で、正直、嬉しい半面、私たちが良いのだろうかと思いました。しかし、こうした思いは、表彰式前夜祭で挨拶された、日下公人会長の「日本人は謙虚さが美德ですが、これが海外だとみんなで喜び合うものです」という言葉で、今回、社会貢献表彰を受賞できたことを素直に喜び、これからの未来へ繋ぐ希望の礎にしていこうと、心新たにしました。

表彰式当日、これまでの若竹福祉会の歩みを振り返り、胸の底からフツフツと沸き起こる思いが、感謝と感動となり涙が溢れてきました。1982年沖縄県内の先陣をきってスタートした若竹共同作業所は「どんなに重い障がいがあっても働きたい！働く中で生きる喜びをつかみたい！」と願った当事者と「何とかしたい！」という人たちの熱い思いが結び合っスタートしました。若竹に続く県内の作業所が5年、6年、7年の内に社会福祉法人に移行していくのを見送りながら、次々と押し寄せる困難や苦難を前に、矛盾と葛藤を抱え歩む日々でした。それでも希望を失わず前向きになれたのは、障がいのある方々やご家族の困窮した状況を前にして、何とかしなければという使命感と、地域の方々をはじめ、多くの人々の励ましと支えがあったからです。1997年に社会福祉法人に移行した後も、行き場のない障がい者を受け入れ、定員をはるかにオーバーする事態に、新たに無認可作業所を開所したり、また、当法人の分場として受け入れてきました。このように若竹福祉会は、いつも障

がいのある方々の思いとニーズに応えることを念頭に、地域の中で活動し、今年31年目を迎えています。今、振り返ってみても、がむしゃらになれる時代であり、できる環境が与えられていたのだと思います。

今回こうした私たちの活動に目を留め、評価して下さった社会貢献支援財団に心より感謝申し上げます。若竹福祉会はこれからも「生き生き福祉の未来づくり」に向けて、共に汗し涙しながらも笑顔で歩み続けて参りたいと決意を新たにしています。

理事長 村田 涼子



▲ 作品



▲ 82年 若竹共同作業所 開所式



▲ 作業の様子①



▲ 作業の様子③



▲ 作業の様子②



▲ 作業の様子④

NPO V ハート



代表
小豆島 正典

大阪府

ベトナムで2002年に普通に社会生活を送れる可能性を持った、知的障がい者に向けた自立支援を行う組織として設立された。同国のビンズオン省で障がい者職業訓練センターを2006年に設立し、150名を超える障がい者が寄宿しながら手に職をつけている。また、翌年にホーチミン市には「G-CoCoRo」作業所を設立、通所者は織物や裁縫の技術を学んでいる。ベトナムでは知的障害者へのサポートは遅れており、国柄、海外のNGOの活動は制限され監視も厳しい中、運営方法を模索し活動している。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

2013年11月、社会貢献支援財団から表彰を受け大変嬉しく、私たちVハートのことについて、この機会にみなさんに紹介したいと思います。

Vハートは、ある一人の女性からの募金によって出来ました。生まれながらにして障害があったその女性は、勤めていた障害者施設で事故に遭い、労災が認められて長らく入院生活を送っていました。何度かの死に目にあって、そのたびに生かされてきたと彼女は語りました。10年に及ぶ闘病生活の末、彼女の出した結論は、死ぬまでに自分の蓄えたお金を同じように障害で苦しむ人たちへの援助に使いたいと言うことでした。ベトナムの障害者にベトナム赤十字を通じて1億円を募金したいので、紹介してほしいと言う最初の依頼があったのは2001年の秋でした。寝たきりの彼女の病室に駆けつけ、何度も筆談と文通で相談した結果、日本で団体を作り、直接支援を届けることが最善であろうと言うことになり、NPOVハートを誕生させました。2002年6月設立総会を開き、10月にNPO認可が下りました。

彼女は熱心に語りました。私の名前は伏せてください。同じ障害者として当然のことをしただけなのですから。知的障害のある人達の奨学援助や、出来れば自立支援を行ってほしいと願いました。私たちは、どのようにそのお金が出来たか知りたかったので聞きました。すると、こともなげに、入院の費用は労災から出ています。給与は10年分使うことがなかったので溜まりましたと言うことでした。両親より先に自分は死ぬし、両親はそのお金がなくてもやっていると伝えてくれたので募金することにしましたと語りました。私たちは彼女のその決心の固さと情熱に感動し、これまで歩んでくることが出来ました。その彼女は2005年Vハートの仕事が完了する前に亡くなりました。亡くなる直前病室に見舞いましたが、「私の声は、もったきれいだっただよ」と、声を振り絞って発声されたのを鮮明に思い出します。気管切開をして呼吸器を付けていて筆談と文通しかできなかつたのが、そのときは呼

吸器をはずされていたのです。直後の訃報により、死ぬ前に自分の声を出したかったのだと判りました。彼女の死後、私たちは佐々木和江さんのその名前を公表しました。

このたび表彰を受けたのは、この佐々木さんであるとそのように思います。Vハートは、彼女の遺志を受け継ぎながら、ベトナムの地で、支援活動を続けてきました。ホームページでそれらの活動を紹介していたことが財団の目にとまり、表彰されました。この表彰をきっかけに、さらにVハートの活動を継続しようと、決意を新たにしているところです。このたびは本当にありがとうございました。

NPO V ハート代表 小豆島正典



▲ 職業訓練センターの開校式典・テープカット



▲ G-CoCoRo みんなでこころ織り



▲ 障がい者の為の職業訓練センターの開校式 2006年10月



▲ センター内の縫製教室



▲ センター内のパソコン教室

株式会社 チットチャット



代表取締役社長
森嶋 勉

大阪府

障がい児（特に発達障がい児）のスポーツ指導を目的に2012年に大阪市で設立され、スポーツを通じた障がい児・者の余暇支援と自立支援にスポットを当てて活動し、発達障がいを持った子どもに運動を通じてモラルとルールの中で生きる力を育て、可能性を引き出す手伝いをしている。マンツーマン指導で行い、月200人くらいがトレーニングを受ける。このようなサポートを行うところは無く、特別支援学級では学べない、謂わば、個別指導塾のような場所であり、日々予約で一杯の状態である。個々の障がいの状態を見て、それぞれにあった指導をおこなうことから、ここでの療育を受け、出来なかったことが出来るようになるなど、一度覚えた体の感覚は忘れることがなく、大きな成果を生んでいる。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は社会貢献支援財団に受賞者として選んでいただきありがとうございました。

平成16年度よりNPO活動を始め、平成24年度より放課後等デイサービス、児童発達支援事業のもと発達障害児を中心とした運動・スポーツ活動のサポートを続けてきました。その功績がこのような形で認められたことはこのうえない喜びでございます。

発達障害児は社会性の質的障害、コミュニケーションの質的障害、想像性の質的障害といった障害が主な療育のターゲットにされます。そして運動、スポーツといった身体活動は苦手な分野の活動として扱われ、なかなか療育・治療の主体として取り上げられないのが現状です。しかし、人のからだのベースはからだです。からだがしっかり扱えてこそ人としてのベースが整い彼らの質的な障害の軽減につながるはずです。

チットチャット・スポーツ塾は平成25年4月に3号店を開設する予定です。すべての店舗あわせて約300人近い発達障害児のサポートをになうことになります。この300人のサポートを軸に今後も発達障害児の運動・スポーツサポートの拠点として活動しつづけていきたいと考えています。そして彼らの生活の中に当たり前のように運動・スポーツ活動が取り入れ、彼らの中に眠っている可能性を開き続けることを意図していきたいと思っています。

今回の受賞を励みに、スタッフ一同尽力していきます。

森嶋 勉



▲組体操？



▲指導風景



▲キャッチフレーズ



▲バランス感覚のトレーニング



▲保護者が見守る中療育が行なわれる

社会福祉法人 南高愛隣会(コロニー雲仙)



前理事長
田島 良昭

長崎県

1977年長崎県雲仙市に障がい福祉の現場での活動を目指し、設立された。「ふつうの場所でふつうの暮らし」を目指し、障がいのある本人の願いを叶えるため、試行的な取組みを次々と実践し、職業能力開発のしくみを作って障がい者を職業的自立に結びつけ、グループホームの制度設計・実施でも多くの障がい者の地域生活実現に貢献してきた。2005年、刑務所の中に多くの障がい者や高齢者がいて出所しては再び、刑務所に戻る累犯障がい者の存在に衝撃を受け、「セーフティーネットであるべく福祉、その専門家であるはずの我々が救えていなかった…」という思いから厚生労働科学研究「罪を犯した障がい者の地域生活支援に関する研究」代表者を務め、この研究成果を踏まえ司法と福祉をつなぐ「地域生活定着支援センター」を初め、数々の制度が誕生することとなった。2009年に社会福祉法人では初となる更生保護施設「雲仙・虹」を開所し、司法から福祉にソフトランディングするための中間施設を整備し、さらに、被疑者・被告人などにも関わり、更生支援プランを立て、「地域生活の再スタートへの支援」をテーマに福祉的な更生支援を行っている。2013年3月までに自立準備ホームと合わせ延べ124人を受け入れ、支援してきた。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は私たちの活動をお認めいただき、平成25年度社会貢献者表彰にご推薦、表彰いただき、心から感謝申し上げます。

私達にとっては自分たちの歩いて来た40年を振り返って見る良い機会になり、法人の関係者がそれぞれ自分のことを思い起こし、古い写真等も引っ張り出して眺めながら、思い出に浸りました。

子供の頃から厚生大臣になって、太陽のようにすべての生きる力の弱い人達を救える仕事をしたいと夢見て、30歳近くまで政治の世界で活動していましたが、さすがに大人になると、自分の力の限界と具体的に組みたい仕事が見えてきました。太陽のようにすべての人を照らすような力は到底ありませんが、もしかしたら、ろうそくの火のように身を焦がし燃やす炎を作り出せたら、小さな小さな光であっても、ほんの一隅でも照らすことが出来るのではないかと考えて、家族や仲間と活動を始めました。

当時は、知的障がい者は家庭の中で隠して育てるか、ほんの少ししかない入所施設に、運よく入所でき、その中で一生、保護収容されることに感謝しなければならぬ時代でもありました。

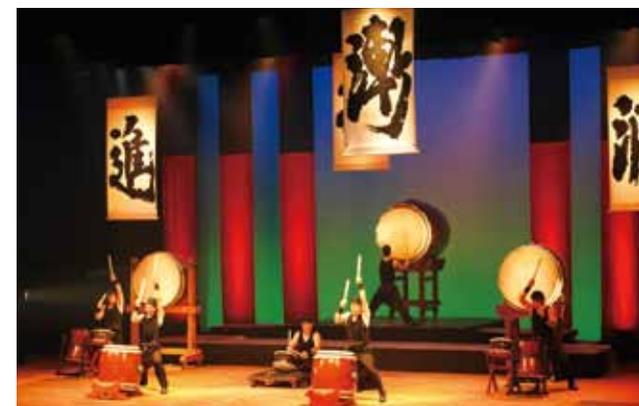
しかし、せっかくこの世に人間として生まれてきたのですから、『特別の場所で

特別の生活を』一生させられるような人生ではなく、『普通の場所で普通の暮らし』を安心して出来るようになれないだろうか？とご本人の身になって考えました。

働く力を高める努力、雇用条件の改善、生活環境の整備等が地域の住民の皆様の協力で進み、2,000人を超える人が、故郷に近い地域で暮らせるようになりました。

今では、少年院や刑務所に居た障がい者や高齢者も罪を繰り返す人も少なくなり、触法、累犯問題に対しても支援の輪が広がり、ただただ感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

社会福祉法人 南高愛隣会
前理事長 田島良昭



▲ 勤労障がい者長崎打楽団「瑞宝太鼓」の公演の様子



▲ 更生保護施設「雲仙・虹」外観



▲ ボランティア活動(海岸 公園 道路の清掃活動)



▲ そうめんを作る入所者



▲ パン作り



▲ 牧草の回収作業

社会福祉法人 風舎



理事長
岩切 裕

宮崎県

宮崎県日向市で、天然酵母のパンなど素材にこだわった食べ物づくりと販売を軸に、知的障害者や自閉症の人を支える活動を21年にわたり続けている。施設長の溝口氏は兄に知的障害があったこともあり、福祉の道を志した。福祉施設での仕事を経て、兄を受け入れるためにも何かしなければと1992年「パンとやさいの店風舎」を開店した。店は後に小規模作業所から社会福祉法人となり、「知的障害者通所授産施設 風舎」となった。また、グループホーム、ケアホームなども開設し、生活介護事業者「風舎 つるまち」ではちんどんパフォーマンスの練習を重ね地元のイベントに出演したり、アートでの社会参加を目指して絵画などに取り組んでいる。施設長は、障害者が社会に出てトラブルに遭った時にどう難局を乗り越えられるか、そうした力をつけるため「(障害者)目の前に大きな石をおく」という方針で、障害者が望む地域で普通に暮らせる社会を目指している。

◇推薦者：西日本新聞社 編集局編集委員 木下 悟

「風舎が社会貢献賞にノミネートされた」「何かの間違いでは・・・？」
嘘のようなほんとの話に現実感を覚えるには私にとって時間が必要でした。

表彰式が近づくとつれ、社会貢献賞をいただく意味の大きさが理解できるようになり、「これは、これからが大変だ！」と思うようになりました。

1992年、日向市の街中に「パンとやさいの店」を開業以来20年以上、「障害のある人々にとって住みよい社会が、生きとし生けるもの全てに生きやすい社会」と信じて疑わず、私たちが住むこの地域で障害者が安心して暮らしていくために必要なことを、少しでも整備していかななくては、そのために微力ながら力を尽くしたい。その一念で、がむしゃらに前ばかりを見て走ってきて、今、ここにその20年に対して評価をいただいたこと、そしてその評価の価値が今後問われてくるだろうという予感。考えれば考えるほど、緊張感と責任感で身震いします。

私たち風舎がやっていることといえば、12月はクリスマス。風舎の就労継続支援B型事業所では、毎年この月になるとドイツのクリスマスパン「シュトーレン」の製造と販売に追われます。今年目標3000本の売上を目指しています。37人の利用者と10人のスタッフが、ボランティアさんの力を借りて、毎日遅くまで頑張っています。目標達成が利用者の賞与の額に影響するので、皆必死です。

生活介護事業所では、この季節はクリスマスや新年をテーマにした作品づくり、また、冬の賞与を使って一人で買物。今ではすっかり風舎の冬の光景になりました。グループホーム等では、クリスマスやお正月と続くイベントよりも、今日飲みに行

くところが優先する人たち、しばらく家族と暮らすための準備に余念がない人たち、1月以降のイベントの日付が何より気になる人たち、様々な顔が賑やかに同居生活を作っています。

風舎の理念「誰もが望む地域で普通に暮らせる社会を目指す。そのために生きる力を育む。特に、伝える力・移動の力・体力」を柱に、利用者の夢や希望を架けて様々なプログラムを提供できるように、スタッフが一丸となって研鑽しています。

風舎の43名のスタッフたち、この人たちこそ風舎が一番誇れる財産であり、彼らが重労働・低賃金の中を共に歩んでくれた事実が、この度の賞をいただく栄誉の源としてであると、しみじみ思います。

思えば、法人設立以前から、利用者やその家族はもとより、素人が作ったパンを毎日食べて下さっている地域の方々、常に温かい目線で見守って下さっている行政や企業の方々、遠方から近くから、有形無形で支援をして下さっているの方々、実に多くの人々に支えられての現在の風舎であることを、「社会貢献賞」という真に誉ある賞をいただいたことで、改めて感謝の思いを胸に深く刻み、これからは、今まで以上に障害福祉に寄与していきたいと胸が熱くなりました。

社会福祉法人 風舎 溝口祐子



▲生活介護事業所 風舎つるまち
「ちんどん way 公演風景」



▲グループホーム・ケアホーム 食事風景



▲就労継続支援B型事業所 風舎
「天然酵母パン製造風景」



▲社会福祉法人 風舎
「地域交流 田植え風景」



▲就労継続支援B型事業所 風舎
「地域イベント販売風景」



▲就労継続支援B型事業所 Croquette.(クロケット.)
「コロケ製造販売風景」

社会福祉法人太陽会 しょうぶ学園

鹿児島県



理事長
福森 悦子

鹿児島市に1973年に知的障害者更生施設として開設。利用者の感性溢れる姿勢に「与えられる」側から「創り出す」側になることを目標に、85年から「工房しょうぶ」と称し、木工、陶芸、染織などのクラフト工芸活動を中心に利用者の個性を発揮できる環境に転換した。その後、絵画や音楽などの芸術表現活動が広がり、展覧会などで障がいがある人たちの才能のすばらしさを伝えてきた。06年には人と環境「衣食住+コミュニケーション」をテーマにもものづくりと環境と就労を融合させ、パン工房、パスタカフェやギャラリー、地域住民が利用できる地域交流スペースなどを整備し、開かれた施設づくりに取り組んでいる。毎年10,000人以上の人が施設を訪れ交流し、開かれた新しい福祉施設とコミュニティの役割を果たしている。

◇推薦者：西日本新聞社 編集局編集委員 木下 悟

今から40年前、昭和48年「福祉元年」に精神薄弱者福祉法に基づく入所更生援護施設として、社会福祉法人太陽会「しょうぶ学園」が誕生しました。

私は、小学校の特殊学級（当時）での職歴を経て、昭和41年から6年間精神薄弱児入所施設（当時）で指導員として働いておりました。言語障害、身体障害、知的障害の方々は障がいがあっても皆素直で、実に情が厚く、毎日の仕事を楽しみでした。しかし、親自身は子供を育てる方法すらわからず劣等感を持ち不安の連続で、ただ盲愛の中で育て、家庭の悩みや問題は大きいものでした。その時私は、親の安定した生活こそが子供の心に通じ、子供本人の情緒の安定につながるのだと確信し、入所施設の開設を決心いたしました。

現在、自宅療養中の創設者の夫と共に歩いてきた40年を振り返ってみますと「喜怒哀楽」の連続でした。時代は変わり、障がい者を取り巻く法律や環境も随分と発展してまいりました。しかし、創立当初から一貫して太陽会の姿、精神を守りつづけたものがあります。それは一つには、利用者の素直な、欲望のない、美しい心です。言葉で意思表示ができなくても潜んでいる感情は実に純粹であるということです。二つには、見守って下さるご家族の暖かい愛情に教えられ、心をうたれながら支えられてまいりました。また、三つには、支援する職員が、利用者の人格の尊厳性に立ち、各個人の能力を引き出し伸ばしていくことによって、劣等感に閉じ込められていた心をやわらげ、「その人らしく生きる」ことの援助を続けていることであると思います。

平成18年の入所施設の全面改築に伴い、本来のケアに加えて「衣食住+コミュ

ニケーション」をテーマに、施設内にレストラン、そば屋、パン屋、クラフトショップ、ギャラリーなどの交流スペースを併設し、再スタートしました。人が本来持っている「力」を引き出し発揮するエンパワメントの発想を基に、展覧会での発表、音楽パフォーマンス、独自の教育プログラム、市民とのアートコラボレーションなどの表現（アート）活動を通して障がい者自身が自分を発揮する機会を導き、社会とリンクする独自のイベント等を展開しています。

最後になりましたが、このたびの受賞に際しまして心から感謝申し上げる次第であります。これは、働く職員、そして地域の支える人すべてのおかげであることを強く感じると同時に、今後この賞を私たちの反省と推進力として、寄り添うケアと共生するまちづくりのために、新しい障がい者施設の役割を担っていきたいと思っております。

福森 悦子



▲ otto&orabu



▲ 地域交流フェスタ in しょうぶ



◀ アートワーク

陶芸作業 ▶



▲ 園庭からの風景



▲ レストラン就労支援



▲ アメリカでの展示会 2003.fabulous fabrics

NPO 法人 海外に子ども用車椅子を送る会



会長
森田 祐和

東京都

「子ども用車椅子は子の成長ごとに買い替えられるが、費用は国から9割が負担される。壊れていない車椅子を廃棄するのは勿体ないし、税金が捨てられているようなもの。この制度を何とか変えられないか…」と考え、海外の発展途上国に送り届けようと思いつき、平成16年にボランティアグループを設立し、同18年にNPOの認可を受けた。会員は約70人、特別支援学校や個人から提供された車椅子を集め、毎月会員が洗浄、修理、整備して新品同様に仕上げ、南アジア、アフリカ、中南米などの子どもに届ける。同25年3月までに20カ国3,145台を送り届けた。贈ったら終わりではなく、あくまでも貸与するもので、破損したら直し、部品を送る、小さくなったら次の子どもに貸与するという仕組みを作っている

◇推薦者：片野 智之

小さな車椅子を開発途上国に送り続けて10年近く経過しました。

海外の肢体不自由な子ども達がどんな日常を過ごしているのかは、知られていません。というのも、室外に出る機会も、移動する道具もないからです。

社会で隠蔽されている子どもも多いことでしょう。「存在が明らか」ではない彼らに移動手段である車椅子をお送りし、社会との接点をもっといただき外部に触れていくことは、人間の生活にとっては最も重要であろうと想像します。

たとえ移動できなくてもよいのです。車いすに乗り玄関先に出るだけでも外気に触れることができます。光も風も感じることができることで鬱屈した毎日が改善できることでしょう。

今回の受賞は、私たちがすすめる活動の支援と激励と受け止め、日々精進していきたいと思えます。

森田祐和



▲クアラルンプール郊外の障害児福祉施設を見学の森田氏とご子息



▲ベトナム ハノイ北200kmの山村へ家庭訪問



▲ネパール ボカラにて贈呈式(現地NGOへ100台贈呈)



▲ベトナム赤十字が受けてとなり贈呈 ハノイ近郊で家庭訪問



▲エチオピア バハルダールにて車椅子を贈呈し家庭訪問



▲枯葉剤の影響で歩けぬ青年へ贈呈 (ハノイ北200kmの山村)



▲マレーシアの施設で日本から送った車椅子に乗る地元の少年とご子息

NPO 法人 スマイルクラブ



千葉県

体育教師であった理事長が発達障がい児を持つ保護者から学校の体育の事業についていけないので運動を教えてほしいとの依頼に応え、千葉県柏市で1998年に運動教室を開始した。口コミで教室に通う子は増え、開催地域も県内のみならず他県に及んでいる。参加する子どもは障がい児だけでなく、その兄弟や運動が苦手な健常児もいる。2000年からNPOの認可をとり、幼稚園児や中高年向けの体操教室を開き、種目も拡げ、総会員数も増え総合型地域スポーツクラブに進化している。学生にボランティアでの参加促進してきたことで、ボランティアが研修生、スタッフへと育ち、小学校の体育授業のサポート事業も行っている。またアジアとの障がい者スポーツ指導者とのネットワークづくりも行っている。障がい者の領域、特に発達障がいの分野でのスポーツ活動を行なうNPOのパイオニア的存在である。

理事長
大浜 あつ子

◇推薦者：茨城大学教育学部 勝本 真

この度は名誉ある賞をいただきまして、ありがとうございました！

思えば早いもので、NPO法人化してから13年経ちました。初めは公民館的な体育館へ発達障がいの子も通って来て運動指導をしていましたが、口コミで人数が増えたので、あちらこちらの小学校の校長先生に頼み込んで学校開放を利用させていただき、教室を増やすことになっていきました。その際には、指導者も増やさなければといろいろな方に関わっていただきましたし、ボランティアの募集に大学の先生方にもご尽力いただきました。その結果、地域も柏市にとどまらず、松戸市・船橋市などへ広がり、さらに県を超えて水戸市・取手市・大阪狭山市・横浜市・熊本市で教室を開催することとなりました。教室種目も、バレーボール・バドミントン・バスケットボールのスポーツ教室や健康体操教室、幼児体操教室と広がって、現在600名を超える方が会員として参加してくれるまでになりました。

初めに来たときには小学校1年生だった子どもが今では仕事をしながら、教室に通うようになっていくというケースも多くあり、長いおつきあいをさせていただいています。

その会員の中から、小さい子ども達の指導をお手伝いしたいという申し出があり、数人がアシスタントスタッフとして関わってくれるようになっていきます。また、スポーツ教室や健康体操教室の方達の中からも、数人が「運動が苦手な子の教室」をお手伝いして下さっています。

このような背景もあって、当クラブの会員の皆さんは発達障がいということへの理解があると思っています。「バリアフリー」とは簡単にことばには出来ても、実際

にふれ合わなければ本物の理解にはならないと感じているからです。

授賞式では、たくさんの素晴らしい活動をされている方達にもお会いできて、大変勉強をさせていただきました。また自分たちの活動を顧みることができて、これからの活動へますます意欲を燃やすことが出来ました。

現在の会員の方達をはじめ今まで携わっていただいた方達にもこの賞の喜びをお伝えしたいと思うとともに、この賞に恥じぬようスタッフ一同これからも頑張りたいと思っています。また、授賞式での日下会長が「日本人は遠慮深いので自分たちの活動を自慢しないが、もっと自慢していいと思う」と言われたことばを胸に、少し自慢していこうかと思っています。

NPO法人スマイルクラブ
理事長 大浜 あつ子



▲ 2006年中国北京体育大学でのアジア障害者スポーツ指導者ネットワーク



▲ 「苦手教室」での準備体操



▲ バレーボール教室



▲ 「苦手教室」のプールイベント
(柏高校学生ボランティア)



▲ 「苦手教室」での跳び箱



▲ 柏市協働事業「学校体育授業サポート」で
小学校の体育サポート



▲ 発達障害児の運動教室
「運動が苦手な子の教室」でのリレー



▲ 高齢者対象の健康体操 (スマフィット)

神 幸雄



神奈川県

1997年パラリンピックで日本は未出場種目の脳性まひ者7人制サッカー（CPサッカー）の存在を知り、パラリンピックへ出場したいという夢を持ち、日本で初めて同大会へ出場を目指す脳性まひ者のためのサッカーチームを結成した。活動を広げるため2001年に日本脳性麻痺7人制サッカー協会を設立し、全国大会の開催やCPサッカー日本代表チーム編成に向けた選考会を開催した。神さんも代表選手に選出されたが、2006年には指導者となり、2009年から2011年には監督としてパラリンピック予選大会となる国際大会へ出場した。地元神奈川県でもチームを結成し、ジュニアチームも作ったことから、近隣都県から約50人の脳性麻痺児が通っている。現在は、CPサッカーの普及と発展、障がい児のためのスポーツ環境の充実に尽力している。

◇推薦者：草野 勝彦

このたび、このような大変名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。また、表彰式典では、全国において、様々な活動をしている多くの方々と交流し、見聞を広めることができました。とても有意義な1日を過ごすことができ、関係者の方々へ心より感謝いたします。

私が活動している脳性まひ7人制サッカーは、立って行う脳性まひスポーツの中で、唯一の団体スポーツ競技です。

この脳性まひ7人制サッカーは、パラリンピックの正式競技ですが、未だ日本はパラリンピック出場を果たしていません。しかし、2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。脳性まひ7人制サッカーにおいても、東京オリンピック・パラリンピックの実施競技となり、我々日本もホストカントリーとしてパラリンピックへの出場が予定されています。

脳性まひ7人制サッカーは、7年後の東京オリンピック・パラリンピックに向け、ジュニア世代（肢体に障害がある小学生や中学生）の育成を本格的に始動したばかりです。国内で唯一肢体障害者のジュニアチームを持つNPO法人CPサッカー&ライフ エスペランサを中心に、普段の練習の他、Jリーグ（サッカー）やFリーグ（フットサル）で活躍した元プロ選手を指導者として招き、子供たちの成長を導く質の高いトレーニング（平成25年度は6回開催）、陸上競技の専門指導者による「走り方教室」や理学療法士による「動作法トレーニング」を行っています。以上のようなサッカー技術や体力の向上に加え、一流のスポーツマンになるために、スポーツを理解し、スポーツを楽しむための心構えを学ぶ「スポーツマンシップ講座」や、聞く力・話す力の基礎トレーニングで、コミュニケーションする力を身につける「コ

ミュニケーション講座」など、障害児者に社会参加への意欲や社会的スキルを育成するプログラムも実施しています。

これらの事業あるいはプログラムは、脳性まひ7人制サッカーに携わるスタッフの方々の地道な支えと情熱、また、多くの関係諸団体の協力・支援があって成り立っています。2020年東京オリンピック・パラリンピックで好成績、成功することは、とても大事なことです。これらの活動を通じて、障害のある子供たち自身が、自主的、自立的にスポーツに参加する意欲と行動力を備え、様々なことを学び・経験し、向上心を持って、人として成長することが最大の目的です。

私自身も、社会貢献表彰を受賞したことを励みにし、今まで以上に様々なことを学び・経験し、向上心を持って子供たちとともに成長し続けたいと思います。



▲ CPサッカー・エスペランサのメンバーと共に



▲ イベントでのワークショップの様子



▲ 講習会で指導



▲ エスペランサのキッズ・ジュニアサッカースタート



▲ 姉妹クラブ・韓国ゴムドゥリ蹴球団との交流試合

NPO 法人 チェルノブイリ医療支援ネットワーク



理事長
河上 雅夫

福岡県

1990年に設立され、2007年にNPO法人となった団体で、これまで23年に亘り会員からの募金で、チェルノブイリ原発事故により被曝したベラルーシ共和国住民に対し支援を行っている。当初はベラルーシ国内に転地療養施設を開設して子どもたちの保養を行っていたが、1997年からは現地における「小児甲状腺がんの早期診断・治療システム」の確立のため専門家を派遣し、両国専門家による共同検診チームにより甲状腺検診を行っている。2009年からは日本医科大学・清水一雄教授指導の下、傷跡の残らない甲状腺内視鏡手術をはじめとする医療技術支援を行っている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

1990年、チェルノブイリ原発事故の被災者の状況が伝えられるようになると、各地で何とか支援したいという動きが始まりました。そして、九州各地のメンバーが中心となってチェルノブイリ支援運動・九州が結成されました。最初は救援物資を航空便で送ったのですが、途中で行方不明となるトラブルが発生して、その後は自分たちが運ぶことにしたのです。

92年からはベラルーシ国内の非汚染地に転地療養施設を開設して、延べ2,700人の子どもたちの保養を行っていましたが、現地から小児甲状腺がん多発の情報が届くようになって、1997年からは甲状腺がんの「早期発見・治療システム」確立のため、専門家を派遣し、両国専門家による合同医療チームにより甲状腺検診を行うなどの、被曝者支援の医療活動を続けています。これは、首都から遠く離れた地方では十分な検診を行うことができず、手遅れになったり、事前の検診なしで手術したために不要な手術を受けたりするという例があり、地方都市での自立した検診・治療体制を作りたいとの思いからの活動でした。

甲状腺がんの検診では首に注射針を刺して細胞を取り出す吸引穿刺という技術が不可欠ですが、この吸引穿刺をはじめとする検診技術の向上のための支援を続けました。そして、支援開始から10年ほどで見違えるほどの検診技術の進展がありました。当初は日本人医師の検査を後ろから見るだけだったものが、日本人と遜色ないかそれ以上の技術を有するようになったのです。

ベラルーシの甲状腺がん手術では首のまわりを大きく切るために、傷跡が残ってチェルノブイリネックレスとも呼ばれ、若い女性などには大変辛い手術となっています。そこで、2009年からは傷跡が目立たない甲状腺内視鏡手術を開発された日

本医科大学の清水一雄教授を検診に参加していただき、ベラルーシでの甲状腺内視鏡手術を普及するための活動を行っています。現在までに、清水先生によって9例の甲状腺内視鏡手術を行い、また、ベラルーシの医師による手術も30例近くになるなど、徐々に甲状腺内視鏡手術が広がってきました。

福島原発事故の発生から2年が経過し、甲状腺がんへの関心が高まっています。私たちがベラルーシで培った支援の成果を福島で活かせる時が近づいていると確信しています。

今回の表彰によって、我々の活動が多くの人々の目に留まり、支援の輪が広がっていくことを期待しております。今回は大変ありがとうございました。



▲ベラルーシでの甲状腺がん検診



▲ベラルーシでの甲状腺内視鏡手術



▲チェルノブイリ原発事故被災者が働く福祉工房「のぞみ21」支援



▲細胞診断用の症例集を露訳した資料を現地の医療機関へ贈呈



▲マトリョーシカ絵付け会



▲1日限りのチャリティー美容室「スネガビーク」。収益金を被災地支援にあてる

藤田 善史



徳島県

1999年からミャンマーで同国の眼科医に超音波白内障手術の指導等を現在までに23回行っている。同国から来日した保健省の技官が藤田さんの白内障手術の様子を見て、同国の眼科医に新しい手術法「超音波白内障手術」の指導をして欲しいという依頼があったことがきっかけ。同国の白内障手術は政治的背景から情報が乏しく、新手術法は導入されていなかった。各眼科関連関係者と共に、超音波白内障手術に必要な器械や手術道具、眼内レンズ、薬剤をもってヤンゴン眼科病院などで指導するほか、過去に設置した検査機械のメンテナンス、動作確認なども行う。また同国の眼科医を自分の病院に招聘し日本の眼科医療を学んでもらっている。こうした結果、現在ヤンゴン眼科病院では年間6,000件行われる白内障手術の30%が超音波白内障手術で行われるようになり、多くの眼科医が同手術法の良さを認識し個人病院でも普及されつつある。

◇推薦者：木村 義次

このたびは社会貢献者表彰を受賞することができ、とても嬉しく思っています。これもひとえに私たちの活動を支援してくださっている多くの方のおかげと感謝しています。当日は、記念写真撮影、授賞式、祝賀会が行われ、授賞式では一件ずつ受賞者の紹介があり、いろいろな形で社会貢献をされているその横顔を知ることができました。人命救助をされた方、障がい者のための自立支援を行っている方、不登校の子供のための相談活動や就労支援を行っている方、更生中の少年を積極的に雇用し支援されている方、ミャンマーで学校建設、運営を手助けしている方、さらには東日本大震災で救援活動を行った方など、これほど多くの方が多方面で活躍しているということに感銘いたしました。今回受賞されたそれぞれの方から、今後の私たちの活動への力をいただくことができたように思います。

私たちの活動は1999年2月から始まりました。ミャンマー保健省より派遣されたミョー・ミント医師から、ミャンマーで超音波白内障手術を覚えてくれないかと依頼されたのがきっかけです。これまでに23回訪緬し、ヤンゴン眼科病院、マンダレー眼科病院を中心に超音波白内障手術器械、器具、薬剤、眼内レンズなどの寄贈を行うとともに多くの超音波白内障手術を行い、現地の眼科医の横について手術指導を行っています。また、これまでにミャンマー眼科医を10名招聘し、1ヶ月間の短期間ですが当院で研修してもらうとともにいくつかの眼科医療機関の見学も行ってもらいました。さらに現地の眼科検査器械や手術顕微鏡などのメンテナンスなども行っています。

日本では一般的に普及している超音波白内障手術ですが、当時のミャンマーでは

超音波白内障手術の知識が少なかったこと、装置が高価で購入しにくかったこと、旧来の白内障手術に慣れていたことなどから、最初の訪緬時に私たちが行った超音波白内障手術は驚きを持って迎え入れられました。それから14年間におよぶ活動で多くの現地医師が超音波白内障手術手技をマスターし、白内障で光を失う方への医療に取り組んでいます。今後もさらにミャンマーでの超音波白内障手術の普及に努め、日本のように、すべての眼科医が超音波白内障手術のできる体制作りに貢献をしたいと思えます。今回の受賞がきっかけで、さらに活動を継続させていく勇気をいただきました。社会貢献支援財団およびそれに関係する多くの方に心よりお礼を申し上げます。



▶ 2012年10月、第22回ミャンマー眼科医療活動。超音波白内障手術、網膜硝子体手術、研修医のトレーニングが終わって、ヤンゴン眼科病院の医師、看護師、技術者と手術室前の廊下で記念撮影



▲ 2008年5月、第18回ミャンマー眼科医療活動。マンダレー眼科病院で、保健省主催の無料眼科検診、無料白内障手術が行われた。6000名を超える患者さんが来て、ミャンマー眼科医12名と一緒に約400名の白内障手術を行った。写真は、チョー・ミン保健大臣とともに術前の患者さんを回診しているところ



▲ 2012年10月、第22回ミャンマー眼科医療活動。ヤンゴン眼科病院で女性研修医の横について、超音波白内障手術の指導を行う。当日は6名の研修医を3人ずつに分け、井上医師(岡山)と一緒に手術教育を行った。



▲ 2002年から2009年まで、計10名の眼科医を約1ヵ月間、藤田眼科に招聘。実際に当院での超音波白内障手術を見学してもらう。また、豚眼を使用し、超音波白内障手術の基本手技を教えた。写真は、2004年4月に藤田眼科で研修をしたサ・ジェイ・ルイン先生



▲ 1999年2月、第1回ミャンマー眼科医療活動。眼科手術用顕微鏡、超音波白内障手術器械を、ヤンゴン眼科病院に寄贈。タン・アウン主任教授(立っている方)と医局で打ち合わせを行う。ミャンマーの眼科医数は約200名、基幹病院であるヤンゴン眼科病院には約50名の眼科医が在籍していた。

カサノバ エクトル



愛知県

ペルー出身の産婦人科医。言語や習慣、文化、医療システムの違いを飛び越え、外国人患者（主に南米出身）と日本の医療システムとの橋渡し役として、名古屋市内のクリニックで、スペイン語、ポルトガル語、日本語で診療している。また、名古屋国際センターにて現役医療通訳や通訳を目指す人にセミナーなども行っている。

◇推薦者：太田 雅子

私はペルー出身の医師で、日本の医師免許を取得後、愛知県そして岐阜県の医療施設にて産婦人科医として20年以上医療に従事してきました。日本の東海地方にはブラジルやペルーなど南米出身の外国人が非常に多く、特に愛知県は現在、6万人近くの南米国籍の外国人が住んでいます。私は、スペイン語、ポルトガル語、日本語で診療を行っておりますので、ポルトガル語圏のブラジル人や、スペイン語圏の人々、ペルー人、コロンビア人、アルゼンチン人、チリ人、パラグアイ人、ボリビア人など様々な国籍の患者さんも診ています。

私が日本で医師として働き始めたころに比べると在日外国人は増え、日本語で話すことができる人も増えてきています。しかし、医療用語は難しく、医療機関での日本語によるコミュニケーションは、外国人患者さんにとって大変な問題になっています。コミュニケーションギャップのある患者さんには、日本で病気になった時の不安や不自由が大きいと思われる。

外国人の診療は、日本人の患者さんよりも時間がかかってしまいます。南米は教育水準がまばらで、日本ではほとんどの人が小、中、高、または大学までの教育を受けていますが、南米では、小学校しか行っていない人もたくさんいますし、貧富や教育水準等、個人間の差が激しい状況が続いています。健康に関しても、とても詳しい外国人患者さんもありますが、癌なのか、更年期なのか、何がなんだか分からない等、健康に関する基礎知識が全くない人も少なくありません。私はできるだけ医療の内容を説明して、外国人にも日本人にも変わらない医療を提供できるよう努力しています。文化が違い、言葉も違い、考え方も違う。どのような症状があり、どのような薬が必要なのか、訴えをじっくりきいて、少しでも患者さんの不安を軽減できるように努めています。

日本と外国では、医療システムに異なる点がいくつかあります。まず、日本のような、国民または社会保険制度は南米には存在しませんので、日本に来る外国人が保険の加入義務やシステムそのものを理解していないため、保険未加入の外国人患者さんが多いです。病気になったり、事故に巻き込まれたりした場合は医療費の負担が重く、自費になると医療費が払えない患者さんが多くみられます。

薬の処方にも違いがあります。日本では医師の指示により薬がもらえますが、外国では処方箋がなくても、ピルや抗生物質まで一般薬局やキヨスク、新聞や小物等を扱う路上販売店でも買えることがあります。海の向こうにいる家族がかかりつけの医師から処方箋をもらい、日本にいる患者さんに薬剤を送っているケースもあります。保険に未加入の患者さんにとって受診料だけじゃなく、薬剤料が高いのも事実です。健康診断やがん検診なども、きちんと受けていないことが多いです。普段特に悪いところが無いから、健診を行う必要がないと考える方が多いようです。

勤務先のクリニック以外でも、外国人医療を支えている人々と共にありたいと考え、微力ではありますが、現役医療通訳者や外国人医療の勉強をしている方達へ向け、医療の分野でセミナー等も行っています。私は診察室で、患者さんの母国語を使ってコミュニケーションをとっていますが、患者さんは病院の受付、検査室、電話等でも常にコミュニケーションが必要で、困ってしまうことがあります。そのために通訳者の協力が重要となります。その他、愛知県の特定非営利活動法人・外国人医療センター（MICA）の活動にも参加させて頂き、外国人対象の無料健康相談会にも協力しました。

今後とも診察室内のみならず、日本で暮らす外国人が、少しでも笑顔で暮らしていけるよう、偏見や言葉の壁を越えるサポート、日本との懸け橋になれるよう頑張っていこうと思っています。この度はこのような素晴らしい賞をいただき誠にありがとうございました。

医療法人葵鐘会

ロイヤルベルクリニック・フォレストベルクリニック
カサノバ エクトル



▲無事に出産した患者さん



▲セミナー風景



▲スタッフの皆さんと



香月 武



佐賀県

1993年からアジアとアフリカの発展途上国で医師として口唇裂、口蓋裂の手術を行なうボランティア活動を行っている。ベトナムで日本口唇口蓋裂協会の仲間と手術を行ったことがきっかけ。その後は医師仲間呼びかけてチームを編成し、ベトナムを始めスリランカ、フィリピン、モンゴル、ミャンマーやチュニジアに活動範囲を拡げている。手術の際、現地の医師の指導も行なうので、現地の技術向上にも貢献している。また手術用機材や救急車の寄贈なども行っている。2012年にNPO法人インターナショナル・葉隠を設立し、更なる活動に意欲を燃やしている。

◇推薦者：西日本新聞社 佐賀総局 諸隈 光俊

20年目の活動のひと区切りであろうか。このたび公益財団法人社会貢献支援財団から表彰を受けることになり、光栄なことである。20年前の冬に初めてベトナム南部、メコンデルタの島、ベンチェ省に行った。東南アジアは初めての訪問であり、単なる旅行ではなく、手術が支障なく行えるよう、準備に神経を使った。手術器械はすべて日本から持って行くのであるが、たびたび停電するというので、部屋は暗闇になっても手術は出来るように、炭鉱夫が使うようなヘルメットに懐中電灯がついた非常用ライトを探して持っていった。予想にたがわず、このライトは十分に活躍して、停電時でも平常と同じように手術が行えた。その病院で使われていた麻酔器は今日のように電気で動くのではなく、手でバッグを押して呼吸を助けるものであったので、電気が来なくても全く問題がなく手術ができた。

ベトナムを皮切に、スリランカ、フィリピン、ラオス、ミャンマー、モンゴルなどアジアの国々から招聘を受け、訪れるようになった。さらに、ワシントンでの学会の際にカナダの専門医の仲間からアフリカのチュニジアで一緒に手術に行くように誘われた。私は学生時代からアフリカで行われていたスイスのシュバイツァー博士の医療に尊敬の念を抱いていたので、自分がアフリカで手術ができると聞き、即座に行くという返答をした。このチュニジアでの手術は、現地の政治的な混乱のために、残念なことに昨年からは中止せざるを得なくなった。

振り返ると、定年前から今日まで外国で自分の専門を生かして、手術をするという機会を得られたのは幸運であった。最近、団塊の世代が定年になり仕事が無くなって、朝起きたら今日は何をしようかと悩む高齢者が多いと報道されている。私は、そういう悩みは全くなかった。行った先々の外国で、多くの友人ができたので、今でもインターネットを使ったメールの交換ができるし、その国の珍しい産物が送られてくる。スリランカからは自慢の紅茶とカレーのもとになるスパイス、モンゴル

からはカシミヤの製品やカラカラに乾燥したチーズなどが送られてくる。先ごろ、スリランカで11年前に手術をした子供が成長して、自分の絵入りの詩集を出版したものが送られてきた。それを見て、これまでの活動が無駄でなかったと実感した瞬間である。

このように色々な国で手術ができたのは、一緒に日本から私と一緒に外国に行ってくれる仲間や麻酔医、看護師さんたちがいるからで、この賞を頂いた折にそれらの人たちに感謝したい。



▲手術後の子供達と母親 モンゴル



▲2005年1月 -30℃ 4人女性医師サポーター モンゴルダurlハン



▲術後患者診察 モンゴル



▲手術指導中 チュニジア



▲診察を待つ患者と親 ベトナム ベンチェ省



▲準備中の手術室 チュニジア